

空振りを恐れるな

R & D 総合センター
河合 道弘

新型コロナウイルスの世界的流行により、良くも悪くも様々な変化が起きました。特に驚かされたのはワクチンの進歩です。遺伝子からワクチンの設計ができ、従来とは比べものにならないほど劇的に開発期間が短縮されました。まさにイノベーションといえます。もちろん十数年前から開発が続けられ、これまでの苦勞の末にこのタイミングで実用化されたわけで、ウイルスの蔓延が続いているとはいえ、携わってこられた研究開発者の方々にとっては感無量の思いではないでしょうか。

弊社は化学材料メーカーで、医薬品業界のような華やかさはありませんが、それでも自分の開発した製品が世に出て長く使われるのは非常に感慨深いものがあります。私が深く関わった製品に「アクリル高分子可塑剤」というものがあります。弊社のオリジナル製品で、このTRENDでも過去に何回か紹介させていただきました。この用途の開発過程の話を少しさせていただくと、建築用のシーリング材に本アクリル高分子可塑剤を用いてみたところ、その業界において課題となっていた耐久性が従来の可塑剤との比較で数倍向上し、劇的な改善がみられました。もちろんある程度の見込みはありましたが、お客様の評価でも期待以上の結果が出たため、すごく興奮したことを覚えています。その後、いくつものハードルを乗り越え現在の製品に至っていますが、そこで起こった劇的な変化がこの製品開発の分岐点になっていると考えています。

このような開発における劇的な変化の瞬間は、既存製品の開発過程でも、現在開発中のテーマでも幾つか見受けられます。これらに共通していることは、いずれも従来とは異なるアプローチを取っているということに尽きます。開発に行き詰まったら、思い込みを捨て、材料や合成方法を変えたり、条件や順序を変えたり、今までとは違うことをやってみましょう。もちろん空振りすることの方が圧倒的に多いですし、「そんなことをしても到底うまくいくとは思えない」などと、モチベーションが削がれるようなことも周囲から言われます。しかしながら、やってみて初めてわかったり気づいたりすることもたくさんあります。だからこそ、劇的な変化の瞬間を見出すには、空振りや失敗を恐れず、粘り強く答えを探し続けることが重要なのです。

ここ十年くらいでしょうか、入社希望者や新人の研究員との面談で、「世の中に役立つモノづくりをしたい」「この手で新製品を開発したい」といった声をよく聞きます。「初心忘るべからず」の精神を大切に、その思いをぜひ実現してもらい、製品を世に送り出す達成感を味わってほしいと切に願っています。そのためには、失敗を恐れず、どんどん新しいことに挑戦してほしいと考えています。
